



Title	〈韓国〉の創出・再構成される〈日本〉
Author(s)	山中, 千恵
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/45727
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	やま なか ち え 山 中 千 恵
博士の専攻分野の名称	博 士 (人間科学)
学 位 記 番 号	第 19015 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 16 年 9 月 30 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学 位 論 文 名	〈韓国〉の創出・再構成される〈日本〉
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 伊藤 公雄 (副査) 教 授 牟田 和恵 教 授 川端 亮

論 文 内 容 の 要 旨

本論は、グローバルなポピュラーカルチャーが可能にする、新しい日韓関係とは何かを考えることを目的とする。これを考えるために、韓国におけるマンガ文化を手がかりとして、トランスナショナルなポピュラーカルチャーが韓国社会にもたらす変化と、それを背景にしてあらわれてくるイメージとしての〈日本〉に着目する。分析の枠組みとして、グローバル/「ローカル」/ナショナルを設定し、この関係に注目していくこととした。

こうした分析の結果あきらかになったのは、次のことがらであった。

韓国では、日本まんがを奪用/領有しながらマンガ文化を形成してきた。特に、1987 年の民主化以後の時代は、韓国社会がグローバル化にまきこまれていく過程としてとらえることができる。その中で、社会におけるポピュラーカルチャーが持つ意味は変化し、マンガについて語ることは三つの力学が加わるようになる。それは、韓国における「日本」との関係、「儒教的文化観」、「経済的価値」としてあらわせる。

その後、2000 年を前後するころから、日韓におけるポピュラーカルチャー状況は、双方向にトランスナショナルなものとなっていく。これは、韓国の人々が、グローバル化の流れのなかにいつそう深く巻き込まれていったことを意味すると同時に、韓国のポピュラーカルチャーが「脱領土化」され、グローバルなものへと変化していったことをしめしている。そこでは、グローバルとローカルの「押し引き」が生じ、マンガについて発言するいくつかの「ローカル」なものが誕生していった。

「ローカル」の発言は、先にあげた三つの力学に方向付けられながら、自らの発言の場をめぐりヘゲモニーを争うことになる。分析においては、「ローカル」たちがマンガ文化のありかたをめぐって争う中で、時としてナショナルなものを引き寄せ、利用し、交渉していく過程が確認できた。これらの過程は、総じて、「ローカル」なものをナショナルな境界と一致させようとする欲望につらぬかれたものであった。しかし、その一方で、「ローカル」な試みには、ナショナルなものを食い破ろうとする動きがふくまれていたことも明らかになった。すなわち、グローバルなポピュラーカルチャーは、ナショナルと枠付けられた中の「ローカル」を活性化させ、そのヘゲモニー争いによって、強化されるとともに、揺さぶられていたのである。

このようなヘゲモニー争いの中で、「ローカル」なものたちは〈日本〉を再構成し、ポピュラーカルチャーを通じた日本イメージを持つようになってきた。そこでは、これまでイメージを否定的なものへと方向付けてきた「反日」という枠組が、全面的な影響力を発揮するのではなく、部分化されていきつつある。そして、だからこそ、さまざま

なイメージの総体として〈日本〉が想像されつつあるのだということがわかった。グローバルなポピュラーカルチャーの流れがもたらしたものと、その受容によるイメージの多様化というだけではなく、イメージを方向付け、イメージについての語りを生み出す場そのものの变化だったのである。

以上をうけて、本論は、グローバルなポピュラーカルチャーの相互浸透が可能にする、新しい日韓関係とは、脱日韓的な関係の模索であろうと結論している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、戦後における韓国社会の変化と日本イメージの変容を、ポピュラーカルチャーを媒介にして論じたものである。特に、韓国における日本のイメージを、従来の「反日」か、それとも文化交流を通じた日韓の和解かという視点を越えて、グローバリゼーションのなかでの若い世代の意識変容を詳細に分析することで新たな観点を付け加えようとした点は、きわめて興味深いものといえるだろう。

また、韓国現地での数度にわたる実地調査やインタビューなどを通して、韓国におけるマンガ（韓国版のマンガ）の歴史や日本マンガの受容のプロセス、それにとまなう反日、儒教的文化、経済産業政策の動向などについて詳しく論じている点も、これまでにないユニークな研究であるといえる。

さらに、文化のグローバリゼーションを前にして、グローバルとローカルという現在もっともホットな視座を援用しつつ、それを独自の観点から整理することで、韓国におけるナショナリズム意識の動的な変容や日本イメージの変化を、これまでと比べて重層的な視座で解剖しようと試みている点も高く評価できる。

以上の理由から、韓国社会の変化と日本イメージの変容をダイナミックに論じた本論文は、博士（人間科学）の授与に値するものであると判定を下した。